もう１つの報告

東　　貴　之

私は生産地を踏査する者として，長崎考古学会が 1924（大正 13）年に実施した春山石鍋製造場の調査に対し敬意を表しています。製造場に対する科学的な分析もさながら，荊蕀が繁茂したであろう生産地を，しかも雪浦から徒歩で目指して行った事も評価される事と思います。フィールドワークを第一に考える私にとっては，まさに原点とも言うべきもので，長崎考古学会の精神を見習うよう努めております。

1924（大正 13）年は長崎考古学会が発足された年で，佐藤眞穂氏をはじめとする会のメンバーが西彼杵半島へ行きました。もちろん，観光ではなく調査で西彼杵半島を訪れました。現在の西海市大瀬戸町内，特に雪浦を中心とした調査を行いました。会員はそこで多くの情報を入手していきますが，その情報を集約する形で会員の八重津輝勝氏が調査に入る事となります。調査は小田貝塚と春山石鍋製造場址の２箇所で，後者は私が踏査をしている場所です。話を戻しますが，八重津氏は当時，長崎醫科大の助手で解剖学に精通していました。小田貝塚で出土して洲濱（すばま）の墓地に埋葬された人骨の調査を行い，人類学的な観点から，貝塚の性格を捉えようとしました。また，貝塚の発掘も行い，たくさんの土器や石器を確認しました。八重津氏は報告に土器の図版を添付していますが，この土器はその文様構成から弥生時代のものである可能性が高いそうです（**註１**）。石器は磨製石斧や石鏃などが出土していますが，これらは弥生時代のものとした考えが自然でしょう。人骨の調査では腓骨に菱形の有茎の鉄鏃が付着していたそうです。しかしながら，八重津氏は人骨が弥生時代のものであるとした結論は出していませんので，人骨の時期は鉄が使われてからのものとしておきましょう。

小田貝塚は平成の世になって，大瀬戸町教育委員会と長崎県教育委員会により発掘調査が行われ，中世に比定される遺構と遺物が出土しました。この結果は少なくとも弥生時代以降にもこの場所の活用があったと言えるのではないかと思います。個人的な見解なのですが，このあたりは弥生時代から現代まで利用され続けてきたのでは，と考えています。実際，平成の調査では近世や近・現代の遺物が出土していますので，場の在り方として小田貝塚の地は連続して使われたとするのが妥当でしょう。八重津氏はその報告のなかで，“**小田郷貝塚地層は殆ど撹乱せられて系統的研究に不適当なり**” と述べていますが，これは弥生時代以降も場の利用があったことを示す見解といえます。だからこそ，小田貝塚は層位的な調査ができなかったのではないでしょうか。

現在の小田貝塚は史跡公園となっており，いつでも見学ができます。しかし，かつての面影はなく，大正時代の雰囲気は残っていないのが現状です。近年，河通川の河口付近は護岸工事が行われ，その姿を少し変えています。また，河通川下流～中流にかけて砂防ダムが造られています。このように小田貝塚を含む周辺の環境は少しずつ変わっています。

小田貝塚は河通川と小田川に挟まれた丘陵上に立地します。かつてこの地に長崎考古学会のメンバーが来て調査を行いました。長崎考古学会は小田貝塚と春山石鍋製造場址を中心に調査を行いましたが，このほかにも調査を行い，新規遺跡の発見に尽力しました。可能な限り紹介していこうと思います。

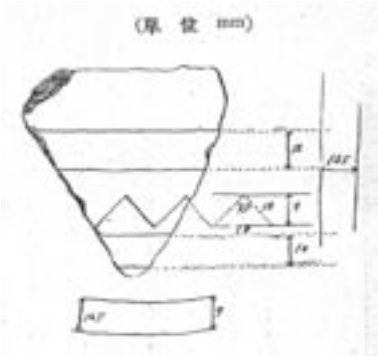
【註】

註１　長崎石鍋記録会員の石橋忠治氏のご教示によるが，本稿における文章の責任は筆者にある。

【引用・参考文献】

八重津輝勝 1924「肥前國雪ノ浦遺跡調査報告」『考古學雑誌』14 － 14 考古學會

内山芳郎 1926「西彼杵郡に於ける史蹟」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』長崎縣史蹟名勝天然記念物調査委員會



第１図　出土土器実測図（八重津 1924）

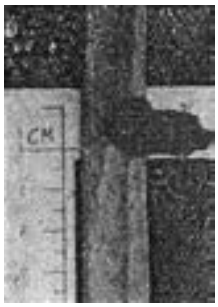
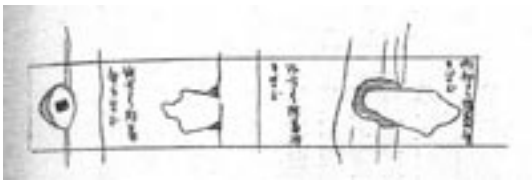


写真１　鉄鏃付着状況（八重津 1924）



第２図　鉄鏃付着状況（八重津 1924）

写真２　小田貝塚遠景（1924 年撮影，内山 1926）

写真３　小田貝塚遠景（2001 年撮影，手前は河通川）